

## 戦前期日本外交における女性平和運動： 婦人平和協会と女性キリスト者知識人

The Women's Peace Movement in Prewar Japanese Diplomacy:  
Women's Peace Association and Women Christian Intellectuals

湯浅 拓也 (Takuya Yuasa)

国際連盟の事務次長として活躍した新渡戸稲造をはじめ、近代日本の対外関係に深い関わりを持ち、戦前期日本の国際協力活動を支えた人物の中には、多くのキリスト者知識人がいたことが知られている。例えば、国際労働機関（ILO）の政府代表を務めた内務官僚の前田多門、パリ講和会議など数多くの多国間外交に携わった澤田廉三などの人物がいる。また、アメリカのキリスト者たちが中心となって設立された太平洋問題調査会（IPR）には、キリスト者であり、東京帝国大学教授であった高木八尺（アメリカ研究）や矢内原忠雄（植民政策研究）といった人物が参加していた。

近年、社会・経済・文化的な側面も含めて近代日本外交を捉え直そうとする研究によって、戦前期に国際交流や国際協力などの活動に携わった人物たちの取り組みと日本外交の関係性が明らかにされてきた。しかしながら、女性知識人が果たした役割への関心は驚くほどに欠落している。ミッションスクールなどの場を中心に、女性キリスト者たちはさまざまな社会活動に参画していた。その中でも、本研究で焦点を当てている婦人平和協会は、1921年に設立され、婦人国際平和自由連盟の日本支部として、世界各国のWILPFと連携するなど、早い時期から国際交流活動に取り組んでいた。

こうした問題意識を踏まえて、本研究では、戦前期日本における女性キリスト者知識人による平和運動が日本外交にどのような影響を与えたのか明らかにすることを目的として設定した。特に婦人平和協会の設立に携わり、日本YWCA総幹事を長年つとめた河井道に注目して、戦前期日本の対外関係に対して、女性キリスト者知識人がどのような影響を与えたのか分析を行った。

2023年度は、1年目から継続して、日本YWCA、婦人矯風会、婦人平和協会などの女性団体の一次史料や文献の収集を進め、彼女らの活動の実態を明らかにすることに重きをおいて分析を行った。また、彼女らキリスト者知識人たちの取り組みが、日本外交にどのような影響を与えていたかという点についても、広く分析を行った。その結果、女性キリスト者知識人たちは、政府や外務省とは異なる問題意識を有しており、国際的な連携を通じて軍縮会議などの場で政治家や外交官たちに影響を与えていたことが明らかになった。上記の結果、研究成果は、日本国際文化学会 2023 年度全国大会において、「国際文化交流における宗教—近代日本のキリスト者とミッシヨナリーの関係性から—」（共通論題③「『国民国家以後の時代』の国際文化交流再考—理念、主体、媒介を中心に—」（2023年7月9日）と題した報告を行った。